

きみのその、
浜辺みたいなさばかすが
くしゃつとゆがむ

青空
だった

さいう 愛知県

「青空」が何かのメタファーになっているが、それが分からないのが良い。泣き出しそうなきみの目を直視できずさばかすを見つめる。「その、」と「青空」の改行に魅入ってしまった瞬間が伝わる。その感情の奥行きに青空があったのかもしれない。下句の印象的な表現に作品の前後まで立ち上がってくる。

カヌレがどんどん固くなったり柔
らくなったり、その不品行さが

存在みたい

吉富 快斗 埼玉県

「カヌレ」も私たちも皆存在しているのだけれど、存在しつづけることこそが輪郭を淡くさせてしまう。何がカヌレをカヌレたらしめるのか、そして何を存在の定義とするのか。カヌレの中身が入れ替わっても、おそらく気付けない。「存在みたい」と疑い続ける。正しさより「不品行さ」がこの世に“そのもの”を存在させる熱を放つ。

石塀に彼らが散っていくことを

桜と呼んだ天体が、ここ

からすまあ 神奈川県

桜が散る場所はもちろん石塀のみではないが、人生の節目に桜を見続けてきた日本人のDNAに組み込まれた説得力を感じる。石塀があり、他にも様々な条件がそろって薄桃色の花は「ここ」で桜と呼ばれた。他の天体で同じ種があっても、違う名前で呼ばれているだろう。桜が桜たり得る価値が、この天体にはあるのだ。

パエリアの
パは

春を待つタイプの

パ

山本先生 東京都

単語を分解したひとつずつに意志があり、集まっているとしたら。すべての言葉には意味があるが、五十音それぞれの存在にも気付いた作者。「タイプ」ということは春を待たないタイプ、他のものを待つタイプの「パ」もいるわけだ。五十音の仕切りの中に様々な性格を持つ「パ」がまとめられていると思うと可愛らしい。日本語がもっと好きになる。

ジェットコースター点検階段の

最上段で

天使が泣いた

Film 神奈川県

場所も時代も、背景も何もわからないけれど美しい、絵画的な作品。一読者としては、人類が減びたあとであってほしい。荒廃した世界との対比のように、錆びた点検階段の上にいる天使が一番美しいと感じる。短詩のよいところのひとつは、語ることができない場が多い故に余白に物語が感じられることだが、この作品もその余白がある。

人とも会わず

犬と布団で二人羽織

加藤 万結子 愛知県

人と会っていない時間の蓄積によって心に広い場所が作られていく。そこにたった一人では孤独だけれど、一人と一匹なら大丈夫。しかし「二人羽織」をする姿はひとつの生き物のようにも見えてくる。作者の意図しないところ、大丈夫の心の影に潜む何かの存在を读者は感じてしまう。可愛くて怖い作品。

梅雨は闇 昨夜未明のことでした

玻璃 愛媛県

「未明」とは夜が明けきっていない頃。下句はよくニュースで使用される文言だが、このあとに何が続くのだろうか。書き手も梅雨の闇に紛れて見えず、私たちも知ることができない。しかし、見るということの何と不確かなことだろう。全く正確に本当の姿を見られるものは何もない。いつだって「闇」で「未明」なのかもしれない。

「うそつき」の

「そつき」の部分だけ響く

真島しましま 千葉県

責める側か責められる側か、そのどちらでも激情を共有するのは苦しい。信頼とは実は身勝手なもので、信じる側の心の都合なのである。けれど、まだ残っている相手への想い、それでも言わずにはいられなかった言葉。吐き出された「そつき」より、躊躇からかき消された「う」の響きがいつまでも残る。

駄菓子屋の脇の小道の夕映えのポ

ストへ封書投函にゆく

皆瀬 仁太 東京都

その場所のこの時間、でないという意味がなくなってしまふもの。ある種の願掛けだが、信じる心によって時間をかけ神聖な場所になった。「ポスト」に辿りつくまでの景の描写に、書き手の視点をなぞるような心地になる。子供の頃から通ってきた道を成長した今も歩き、信じる場所へ辿りつく。ここでしか投函ができない大切なもの。

冬からすれば人々は熱っぽく、

すぐに眠ってしまうのだった

のもしゅうへい 神奈川県

脈絡のなさ、というのは、時としてその飛躍の中にどこまでも世界を構築することができると擬人化された冬の体感時間はおそらくとても長く、人間の「すぐに眠」る行為は死のことだろう。「熱っぽく、」の句点の中には、私たち人間の人生の時間が含まれている。童話の一節のよう。